

〔巻頭言〕

化石研究の総合化

井 尻 正 二

古生物学が科学の世界にあって、学の主体性を主張するためには、学の体系を確立し、それを示すことが必要である。

では、古生物学の体系とは何か、といえば、その柱は古生物学的進化論においてほかにはない。じじつ、生物の進化とは、生物の歴史そのものであり、生物の系統発生の軌跡以外の何物でもないからである。

では、古生物学的進化論にアプローチする方法や如何に、という問いにたいして、今回はただちに返答する意志はない。ただ、今回はその一つの手続きとして、化石研究の総合化を主張したい、と思う。

1954年に、Abelsonが化石の中から有機物を発見して以来、古生物学は革命に突入した観があって、多方面の発見があいついでいる。その結果、化石の研究手段も多面化し、専門の細分化がすすんでいる。すなわち、ある者は電顕の技術を駆使し、ある者はアミノ酸分析機を活用し、またある者は質量分析器を応用する、といったぐあいで、各分野の専門家が生れて活躍している。

しかし、化石の研究はその歴史が示すように、まず化石のマクロの記載分類があくまで基本である。したがって化石の研究には、まずマクロからマイクロへ、記載から分類へ、そしてそれから、という道筋をないがしろにすることはできない。

だが現実には、近代的機器を研究手段とする研究者は、如上のマクロや記載分類といった方法をとる研究者の成果を軽視し、いっぽうこのような基礎的研究にたずさわる学者は、マイクロや近代的機器による成果に、目をとざしがちではないだろうか。

私は巻頭言ということの性格上、あえて具体例をあげることはさしひかえるが、この研究の専門化、細分化、研究分野の交流の貧困化が、古生物学的進化論へアプローチする一つの障害になっている、と断言せざるをえない。この障害を打破するためには、まず各専門分野の研究者が交流し、情報を提供しあい、研究成果をだしあい、それらを総合していくことがどうしても必要だと思われる。

ごく卑近な比喩をあげれば、一人の人間をそのマクロの身長から、あるいはマイクロの血液型から、あるいはその遺伝子組成だけから別べつに判断し、その人間像をつくりあげる者はいないであろう。ことヒトに関するばあい、われわれはヒトについてのあらゆるデータを総合し、立体的にその人間像をつくりあげるであろう。そして、じじつそのようにして、私たちは交友関係をもち、社会生活を営んでいる。

ところが、こと化石となると問題はまったく別である。ある者はマクロの測定だけをして分類や系統を論じ、マイクロの研究成果には耳をかそうとしない。また、マイクロの研究者はその分析値だけをたよりにし、マクロの化石の堆積状況や層序を無視して論文を書く、といったぐあいである。

さいわい、日本には化石研究会という、古生物学者の民主的な交流の場がある。したがって、それぞれの研究者は自分の専門を生かして、よりこまかく、より深く研究をすすめる一方で、たとえ耳学問でもいいから、他の専門技術をもつ研究者の研究成果をとりいれ、化石を総合的に判断し、古生物を立体的に復元するようにつとめたいものである。

さもないと、われわれはいつまでたっても、「木を見て森を見ず」で、古生物学的進化論にも、古生物学の体系にもアプローチできないことになるのではないだろうか。